

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 モーパッサン 『脂肪の塊』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9YKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



モーパッサン

第 78 回のツイキャス読書会の課題図書は、モーパッサン 『脂肪の塊』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「脂肪の塊」感想文

モーパッサン(1880)『脂肪の塊』新潮文庫

この本を読んで最初に思い浮かべた言葉が、「人間ざらい」です。

この小説でモーパッサンは皮肉たっぷりの口調で、馬車で同行したロワーズ夫妻、カレ・ラマドン夫妻、コルニユデなどに対する嫌悪感を隠していません。

作者がこれほど軽蔑しながら描いた人物像だから、それを讀んだ私にしてはよっぽど軽蔑的な状況で、軽蔑的な人間を小説にしたんだなと思いました。

作者の軽蔑感は小説の末尾、ブール・ド・スweif(肉の塊と呼ばれる娼婦の女性)が周りの「慇懃無礼で強引な押し」に負けてプロイセンの士官と寝た翌朝、ようやく馬車出発の許可が下りた時の一文に集約されているのではないのでしょうか。

(引用はじめ)

見れば、馬車にはちゃんと馬がついて、門前で待っている。そこにはまた、真っ白な鳩の群れ。バラ色の眼の中に黒い点をのぞかせ、あつい羽に包まれた胸を張りながら、悠然と、六頭の馬の脚もとを歩いている。じつは、その辺に散らかっている、湯気の立つ馬糞の中に、各自の生命の糧を捜していたのだが。

(引用おわり)

セダンでナポレオン3世がビスマルクに降伏したのが1870年9月2日。

プロイセンのウィルヘルム1世がベルサイユ宮殿の鏡の間でドイツ皇帝の位についたのが1871年1月18日。

これをもってドイツ帝国がビスマルクの活躍(暗躍)によって成立。

この小説は上の政治劇の10年後に書かれたもので、作者はあの革命の虚栄とナポレオンに代表される英雄主義にもう飽き飽きしたとみられます。いわゆる「フランス革命の弔辞」を、軽蔑を込めて言いたかったのかも知れません。

私はフランス革命の実際の終焉、その最終的な終わりは血の週間での殺戮を経た1871年5月30日、パリ・コミュンが徹底的に破滅してからだと思っています。

そのときマルクスの読み上げた弔辞はこの小説のような皮肉なものではなくまじめなものでした。

「労働者のパリは、そのコミュンとともに、新しい社会の光栄ある先駆者として永遠にたたえられるであろう。。。」

(中公文庫『世界の歴史12』より)

(おわり)

「読み手の精神に迫りくる欠如の描写」

本作は、読み手自身の内面に様々な感情をもたらす作品である。

嫌悪、悲哀、激情、不安…だがそれらはどれも不明瞭で判然としない困惑状態として与えられる。

なぜなら、この作品では読み手自身の作品内での取るべき立ち位置が不明瞭で判然としないからである。

この作品は自然主義文学の代表作とされ、物語は第三者＝神(あるいは作者)の視点で書き進められ個々の人物の内面についてはほとんど描写されない描写されないようである。

では読み手もこの神の視点に立てるかということ、実はそうではない。

というのも、この物語の主役であるブール・ド・スweifがその内面を激しく揺さぶられる重要な3つの場面、「士官から強要される場面」「洗礼式に参加する場面」「士官のもとへ向かう場面」について、

作品内でまったく描写がなされないのである。

そのため彼女が何をどのように感じ考え行動したのか、その真実が覆い隠され不明のまま、読み手はただ想像するのみになってしまうのである。これでは全てを客観できる神の視点とはなりえない。

そして同時に、この描写の欠如は読み手が彼女自身へと感情移入することも拒むことになる。

同情とは相手の心に同調し同じ悲しみの位置にまで自分で降りていくことである。

だが、読み手は彼女の心に同調することができなのである。同調なしにかけられる言葉はただの哀れみでしかないだろう。

その点から考えると、語りの視点は神の視点というよりも、伯爵たちの側に近い立場にあるように思える。

このこともまた、読み手を困惑させる要因の一つとなっている。

書き手の視点をなぞる読み手の立場は、読み手自身がブール・ド・スweifを人身御供にした連中の一人であるかのようではないか。

その一方で読み手は陰謀企む連中に怒りをおぼえるであろうが、そうありつつも彼らに一喝入れることもできない、ただイライラする状況のいわば「宙づり状態」に身を置かれるのである。

さらにこの作品が人物の内面を描写しないことは、読み手をさらなる宙づり状態へと追い込むことになる。

通常、客観的描写が物語の主軸となる場合、大抵読み手は合理的理性主義へと導かれる。

個々の事情が軽んじられると、人はより合理的な判断を正しいと考え、また理性的な善をそこに当てはめようとするのである。

仮にこの作品が神の視点からすべて描写されていたなら、伯爵連中をもっと強く批判することも、ブール・ド・スweifを擁護しまた希望を与えることもできたであろう。

少なくとも、彼女はどうすべきであったかなどに考えを巡らせることもできたはずであろう(たとえそれが偽善めいたものになろうとも)。

だが、神の視点を欠くこの作品では読み手にそうした権限が与えられておらず、そのため読み手は、ある種の合理的理性主義が陥る道徳的ジレンマと同じような心境に立たされることになるのである。

この作品にはさらに書き手の視点に関しておかしな点がある。

物語後半(足止め翌日あたりから)、第三者視点であるべき地の文章に、まるで人格があるかのような表現がでてくるのである。

「死ぬほど退屈だったので、…」 「鐘の音が聞こえる。」 「この話を聞いていると、…」 等々、これらの文章には主語が欠けており、それは非人称というよりはむしろ、

伯爵連中が主語となってもよいような記述となっている。実際物語前半では「一同は」「皆」などの主語がきちんと与えられている。

にも関わらず後半のこうした「主語の欠如」は、あたかも読み手がそこに臨席しているかのような印象を読み手自身に与え、いわば読み手は実在しない11人目として物語の中に位置するようになるのである。

この作品は、11人目の人物である読み手に対しこう迫ってくる。

「お前は娼婦に成り代わることはできない、同情しているつもりならそれはただの哀れみに過ぎない」

「お前は伯爵連中を非難するのか、だがお前もそこにいながら何も行動できない愚かな人間の一因だ」と。

つまり『脂肪の塊』は、様々な「欠如」による語り、「欠如」の描写によって、合理性による判断を禁じられ同情も批判も許されない読み手を、傍観と偽善の罪意識へと追いやるような、読み手の精神に迫りくる物語なのである。

(おわり)

「墮ちゆく逃亡馬車」

今までモーパッサンの小説を手にとったことのない私は「脂肪の塊」という題名がいったい何を意味するのか興味をそられた。そしてそれは主人公である太った娼婦への蔑みの意味を含めた渾名だと知った。

普仏戦争直後、プロシア兵の占領下から逃れディエップに向かうための馬車に乗り合わせた様々な階級 10 人の人間模様は現在の私達にも通ずる社会の縮図を表していた。

結局、信仰心と愛国心に一番熱い最下層の娼婦プール・ド・スイフが自ら犠牲になったにもかかわらず、助けた人達から感謝されることもなく汚れた者として最後まで蔑みの目でみられて物語が終わってしまった。

私がこの小説の中で一番悔しかったのは、遅れて馬車に乗り込んだ娼婦に食べ物を誰もわけなかったことだ。

特に尼さんに私は憎悪の感情を抱いた。負傷した兵士は助けるのに、目の前の傷ついた娼婦に食べ物すら分け与えないのなら、神など崇高な理論は持ち出さず、娼婦に頭を下げて「助けてください」とお願いしたほうが人としてまだマシだと思った。

なぜだろう？馬車は無事に出発したのに。娼婦を心の中で蔑んだとしても、全員が少しずつ食べ物をあげるくらいそんなに難しくないはずだ。

10 人の間には世俗的な階級がある。最下層と見下していた娼婦から食べものをめぐんでもらい、強い愛国心やプライドを持つ娼婦の姿勢を見たブルジョア階級は、食べ物をわけ与えないことで娼婦に最下層である事を自覚させ、マウントをとりたかったのではないだろうか。

プール・ド・スイフの涙を見たコルニュデは他の乗客へのあてつけのために革命の歌を目的地のディエップまで歌う。

娼婦だけがプライドを失ったわけではない。

馬車に乗っているその他全員の道徳心のない下劣な行いは自分の尊厳をなくしたに違いない。

馬車の中の全員が最低の卑怯者の逃亡者になりさがったのだ。

(おわり)

「残ったソーセージ」

脂肪のかたまりという題名を初めて聞いた時、何もしないで食べては寝る、食べては寝るの繰り返しの墮落した人を想像しました。

ブール・ド・シュイフは、たしかに、丸々としてはいるけど墮落したような人ではないのに、なんてヒドイあだ名を付けるんだろうと思いました。

このお話に出てくる人は、ブール・ド・シュイフ以外は全員ヒドイ人たちとか人ではなだと思いました。

そのなかでも一番ヒドイと思ったのは二人の修道女です。

他の人達も、最初空腹の所を助けてもらっておいて、恩を仇で返すような仕打ちをしたり、しかも食べ物を分けてもらう前から見下していて、最低な人達なんだけど、修道女はソーセージを全部食べずに、そっとうのうのに、残っているのに分けてあげなかったからです。

そもそも、他に食べられない人がいるのに、自分だけ食べてもそれは本当に美味しく感じるのかな？ と不思議に思いました。

ホントにお腹がすいて、全部食べても足りないぐらいの量であっても、分けてあげないで自分だけ食べる勇気は私には無いと思うし、そんな変な勇気ある人も少ないのではないかなと思いました。

修道女だから、いつも神様に祈っているからもう少し優しさを出して欲しかったという気持ちもあるから余計に気になったのですが、修道女だからという考えは、それも偏見なのかな？ と少し分からなくなりました。

(おわり)

私は石(意志)を投げない

高校時代、友人からあるラジオを録音したテープを聴いてみたくれと渡された。

それは叫ぶ詩人の会のドリアン助川さんのラジオで、若者からの人生相談コーナーだった。

相談者は男子高校生で自分には彼女がいる。彼女は昔援助交際をしていた過去があり、今はそれをきっぱりやめて自分と付き合ってくれている。

ところが彼はそれ以前に付き合っていた女の子がおり、その子が妊娠した事を知らせてきたと言う。

どうしたらいいかわからないから、今付き合っている彼女にまた援助交際してもらい、そのお金で妊娠させてしまった子に墮胎させようと思うのですが、ドリアンさんどう思いますか？というものだった。

脂肪の塊に出てくる成金商人や工場主やに伯爵、その妻達などエリザベートを卑しい性の道具にしか思っていない人々と、過去の現実世界にいた自分と同世代の、後先考えなくせに自分の事しか考えられない少年とが重なってしまった。

ドリアン助川氏は少年に激昂し、ならば君自身が体を売れと言い、少年は黙ってしまい、最後に「よく考えてみます」と言ってそのテープは終わった。

現代においてもマウンティングは横行し、自分を守る為に相手を見下す事は行われているだろうし、それは性の道具としてだけでなく、労働生産の歯車としかみなされない場合もあるだろう。

クラスでいじめられている子を助けようと思っても、今度はその矛先が自分に向かうのを恐れて注意できずただ静観するだけの子供もいるという。

私は私、僕は僕。

誰も私を虐める権利はないし、僕は誰の奴隷にもならないし、他人にもそうさせない。

そう言い通せずには生贄になったエリザベートや、自分を守るのに必死な周りの人達も皆、可哀想な人達だと感じた。

私は「神や仏は許してくださる」という言葉は都合よく使ってはいけないと思う。許す、許さないは人間が決められない世界の話だと思うし、神がいなくても人を裁くのは思惑を纏った個人ではなく法であるはず。

ああ、でもこの作品は戦争で正義だったものが負けた所からスタートしていましたね。法もこれまでとは違ってしまいうですね。なんとも難しい。

戦争反対、いじめ反対。結局私が言えたのはこれだけでした。トホホ

(おわり)

読みはじめてからの1週間

エリザベートのことを考えていた。

小説は、敗戦がいかに惨めな気持ちになり、あらゆる兵士が身も心もぼろぼろになって引き上げる象徴的なシーンからはじまる。「脂肪のかたまり」の乗合馬車は、当時のフランス社会の縮図として、さまざまな主義と階層の人物が描かれている。娼婦と、共産主義者と、彼女を蔑み、我欲しか持たず、良心の呵責を感じない連中。びっくりしたのは修道女の二人もしかり、だったこと。

人間の醜さとはそういうものだ、気持ちいいくらいはっきり言い切るエピソードを読む度に、心がジワジワ痛む。同時に話の筋に織り込まれたフランスの田舎者たちを小馬鹿にしたシニカルでユーモアな表現に罪悪感を感じながらくすりと笑えた。

自分のなかにも、落とし入れた側の彼らような、弱者を差別的に見てしまう醜いものがあるのじゃないかと確かめずにいられず、正直目をそらしたくなり、エリザベートのことを考えると同情や怒りだけではなく複雑な気持ちが残る。

彼女はボナパルト派だ。かつて市民のために「自由」を与えてくれたナポレオンを愛し、国を愛し、もし男に生まれていたら「理念のためなら死をもいとわない」くらいの愛国者だ。

大げさに言えば「フランス国家のため」と、プロシア士官に身を預けたことだけではなく、仲間だと思って優しく接していた自国の人間に裏切られ、どんなに悔しい気持ちでいたろうと思うと、最後の涙は、女の無力さに情けない気持ちにもなった。彼らに対して、仕返しすることもできないが、あんなに強気な性格だったのに言い返す言葉すら浮かばなかったのは、どこまでも切なく悲しい。

登場人物の中で印象的な宿屋の女房。

「狩猟で獲物を殺すみたいに、鉄砲でわたしらの子どもを死なせると、立派なことになるんですよ。いちばん余計に殺した者が勲章なんかもらってね。まったくの話、訳がわかりませんわ。」

戦争の愚かさは人間の愚かさ。レジョン・ドヌール勲章をもらったというラマドン氏はいったいどういう理由で受勲したのだろう。これもモーパッサンの皮肉だったのか？ この小説は、あとからジワジワ沁みてくる。なんて味わいが深いんだろう。かなり苦めだけど。

(おわり)

『素晴らしき明日』

人は、最低限の生命維持が働いていれば、次に向かう先は承認欲求だと私は最近思うようになった。

馬車に乗っている人は、政治的であれ宗教的であれそれぞれの自分が依拠する主義主張を持っている。時にはその主義主張をひけらかし、時には自分の保身のためにそれらを横に置いて「人と人」目線に切り替えたり。本当に巧妙なものだ。

馬車の乗り合い人の「ブル・ド・スイフ」への態度は、特に自分の保身が前面に出る「逃亡」の場面においては、自分目線で事を進めたいと思うそれぞれの思惑が露呈し、旅の恥は掻き捨ての心情なのだろう。とにかくこの災禍から早く脱出しなければ後がないことから、登場人物は手段を択ばない。

私がこの馬車に乗り合わせていたら、「ブル・ド・スイフ」への態度をどうしていたのか。プロシア士官のご指名はたまたま彼女だったが、彼女が居なかったらどうなっていただろうか。出発が阻まれているのは乗り合いの人全員の問題なのに、皆がよってたかって「ブル・ド・スイフ」一人の個人的選択や心情を責めて問題を矮小化させている。

「ブル・ド・スイフ」を責めることができるのは、ドストエフスキー『罪と罰』のカテリーナ・イワーノヴナや、ゾラ『居酒屋』に出てくる貧しき洗濯女だけかもしれない。困窮にあえぎながらも、生計を立てる手段として体を売ることを選んで選ばなかった女性たち。彼女たちなら、プロシア士官に身を委ねるくらいなら自らの舌を噛み切ることを選ぶ人もいたかもしれない。

人は、自分に都合の悪いことは忘れるものだ。「ブル・ド・スイフ」の犠牲も、そのうち忘れてしまう。そもそも彼女の犠牲を「自業自得」とまで言い切り、彼女への罪悪感もかなぐり捨ててしまったのだから。

「素晴らしき明日」は、様々な他者の犠牲の上に成り立っていることをあらためて考えさせられる。便利なスマホは、だれがどのようにして製造し、間に合わせ、我々が発売日に行列をなしてその嗜好品にありつけているのか。もっと身近には、自分が働けて仕事ができていることも誰かの何らかの犠牲を伴っているのかもしれない。

せめてこの読書時間に、誰かの不条理に加担しているであろう我が身をあらためて見つめるのが自分に出来ることか。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 革命歌は歌えない 』

数々の戦争小説が世にあるが、こんなに心臓をぎゅっと絞られる作品は他にみない。

誰に肩入れすることない至極客観的な描写が、物語全体をより救いようのない切なさで包んでしまう。ご都合主義の小説を読み慣れている私には、頁をめくりたくない気持ちにおそわれた。それはきっと、コルニユデの歌う革命歌を聴きたくない登場人物たちの醜さを私自身も持っているからかもしれない。

普仏戦争でのフランスの敗戦下をゆく逃亡の馬車の中で、くしくも社会の縮図が完成してしまう。貴族、豪商、革命家に尼僧、そして娼婦だ。ブルード・スイフと呼ばれる娼婦は、誰よりも愛国心を持っていたために、同衾を望むプロシア士官に馬車ごと足止めを喰らってしまう。ただでさえ、人身御供に差し出そうとしているのにも関わらず、女性たちは「本来はプロシア士官も自分たちの方がよかったに違いない」と女性としての矜持だけは忘れない。本当に浅ましくてぞっとする。

平常時では、人間はいくらでも仮面をかぶれる。上流社会で血筋や名誉や金を誇示できるのは、本来は人間性や器量の裏付けがあつてこそだ。しかし、土壇場ではそうはいかない。この馬車に乗り合わせた「お上品な」人々は醜悪な中身を露呈する。半面、社会では蔑まれている娼婦のブルード・スイフは、純粋な愛国心と思いやりを持つ女性だった。

それでも、物語は冷酷に進んでいく。結局、みんなの犠牲になったブルード・スイフの状況はより悪くなり、悔しさを押し殺してすすり泣くはめに陥ってしまう。

上流階級の夫婦たちはいうに及ばず、尼僧や革命家はどうかだったのか。尼僧は娼婦の犠牲を強いる後押しをしてしまい、いくらフランスの負傷兵を助けに行く大義があつたとしても、尼としての教義を守れていない。革命家も目の前の市民（ブルード・スイフ）を守れないどころか自らの欲が勝って、手を出そうとまです。革命歌を歌う資格なんて、ありはしないのだ。

このような人々で構成されたおぞましい情景は、社会の縮図だけではなく、フランスの敗戦の縮図であつたかもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「ボナパルティズムの崩壊」

主権国家同士の戦争など、勝っても、負けても、結局無産階級の一般庶民にとっては災厄である。インフレや物不足で生活に支障をきたすだけでなく、徴兵や徴用を強いられるのだ。誇り高い愛国者であり高級娼婦であるブル・ド・スイフも戦争の悲惨な被害者になってしまった。

ブルジョワという言葉がある。資産家階級だ。ブレヴィル伯爵は、不動産収入、カレ・ラマドンは、工場経営の事業所得があるブルジョワ。富裕な商人のロワゾオは、プチ・ブルである。

こういう人たちは、賃労働者ではない。蓄財していて、戦時を堪えることができ、うまくすれば、戦争で儲けることもできる。

戦争が起こっても、買い占めや投機で先回りして儲けることができる、利に聡ければ敗戦でも儲けられるのだ。焼け太りだ。

一方、ブル・ド・スイフも、たけくらの美登利のように、遊郭で暮らさなければならない娼婦ではなく、プチ・ブルといえば、プチ・ブルなのだが、ブルジョワと尼僧の共謀にはめられ、人身御供にされて、喰われてしまった。

気の毒な話だが、彼女のように愛国心や信心を利用して、庶民はだまされるのである。愛国心で自らを鼓舞する庶民が、愛国心故に、いっそうひどくだまされる。戦争は、愛国という自己欺瞞を活用して、庶民の尊厳を無残に踏みしめる。

最終部分のラ・マルセイエーズが、特別な意味を持つ。ラ・マルセイエーズは、フランス革命の八月十日事件の主演となった地中海の都市マルセイユ連盟兵の歌だ。国をまたがる王族とそこにびっしりとシロアリのようになたる(第一身分の僧侶、第二身分の貴族の)既得権益を解体して誕生した革命国家フランスの栄光と市民の勇敢を歌っている。

普仏戦争で負けたフランスは、帝政から共和政に回帰した。

ボナパルティズムという勢力均衡型の独裁が終わり、無産階級の庶民と、ブルジョワの階級闘争がはじまる。馬車の中の友好関係が失われたところは、ボナパルティズムの崩壊を暗示している。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343